

医療通訳のための通訳基礎技術とロールプレイ演習の取り組み

「在留外国人に対する HIV 検査や医療提供の体制構築に資する研究」班

研究分担者 宮首 弘子 杏林大学外国語学部教授
 沢田 貴志 神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所所長
研究代表者 北島 勉 杏林大学総合政策学部教授
研究分担者 Tran Thi Hue 神戸女子大学文学部国際教養学科専任講師

研究要旨

2023 年はコロナウィルスの感染拡大が収まり、訪日外国人が急増し、年間で 2,500 万人を突破した。インバウンドに沸いた年となった¹⁾。2023 年 12 月の訪日外客数は、2019 年同月比 108.2%となる 2,734,000 人となり、12 月として過去最高を記録した。それに対し、2019 年に観光庁が旅行業者と宿泊施設へのアンケート調査によると、外国人旅行者が病気や怪我をした際の対応に、54% (旅行業者) と 72% (宿泊施設) の最も高い割合で「会話対応、通訳が十分できない」と回答されている²⁾。改めて医療通訳のニーズの高まりに伴い、通訳者養成が喫緊の課題であることが浮き彫りになった。また、外国人が検査や受診する際に必要な医療通訳は、コロナ禍前の対面から遠隔通訳も加えて、医療通訳は対面か遠隔かは状況に応じて使い分けがしやすくなり、遠隔通訳が恒常的な通訳形態として定着したと言える。したがって医療通訳者には対面のみならず、遠隔でも対応できる通訳スキルを以前にも増して求められるようになった。一方で、医療通訳者はプロの通訳訓練を受けておらず、自己研鑽の方法を身に着けていないケースが多く見られる。そこで、2023 年度の感染症通訳研修は PC やスマホを活用した通訳基礎トレーニング法の習得を目標とした。

当研修は全国に広がる医療通訳者の養成に寄与するため、関東と関西にわけて実施した。研修の企画運営は関西では大阪にある特定非営利活動法人 CHARM (以下「CHARM」)、関東では特定非営利活動法人多言語社会リソースかながわ(以下「MIC かながわ」)にそれぞれ業務委託した。また、本研究班は在留外国人の HIV 検査や医療提供の体制構築に資する研究を目的とするため、通訳研修は HIV・結核に特化した感染症医療通訳研修に絞って設定した。

研修内容は大きく 2 部で構成される。I 部は HIV・結核や社会保障制度に関する基礎知識を中心とする座学で、研修参加者は HIV・結核の基礎知識を学び、保健所、社会保障制度、セクシュアリティに関する理解を深めるものである。II 部は通訳技法やロールプレイ演習を中心とする演習型講義で、遠隔医療通訳に求める通訳スキルの向上方法および現場対応力の強化ポイントの習得を目的とした。本報告の扱う研修の主な内容は、遠隔通訳のスキルアップに有効な通訳基礎トレーニング法の紹介と演習、HIV や結核の医療現場を想定したロールプレイ通訳演習である。

研修参加者は、CHARM は保健所、医療機関などから外国人の感染症患者 (結核とエイズ) を支援するための通訳依頼を受ける可能性がある医療通訳者を対象とした。MIC は保健所などから外国人の感染症患者 (結核とエイズ) を支援するための通訳依頼を受ける可能性がある団体職員、ボランティアスタッフ等を対象とした。

研修の効果は、通訳力の向上については、通訳の正確性と迅速性において、指導スタッフの評価記録からほぼすべての参加者に成長が見られた。研修後のアンケートの回答によると、研修の流れや医療者や患者への対応の要領、各種の技能向上は 8 割ないし 9 割の参加者がとても効果的、或いは効果的だと

高評価である。リモートによるロールプレイ演習は通常に通訳力、現場力の向上に一定の効果があると認められた。と同時に通訳基礎トレーニング法の未習得者がまだ存在し、持続的な自己研鑽の不十分などの課題もあり、定期的な通訳研修の実施が肝要だと改めて実感した。

A. 研究目的

平成 25 年度に、一定の能力を有した専門医療通訳者の育成を目指して、厚生労働省「医療機関における外国人患者受入れ環境整備事業」において「医療通訳育成カリキュラム基準」標準テキスト「医療通訳」が作成された³⁾。以来 11 年が経過し、医療通訳への認知度が高まり、目指す大学院生も現れたが、医療現場は依然として多くのボランティア通訳に支えられている。医療通訳者育成のシステムは機能しているものの、十分とは言えない状況である。

何よりも、通訳者の質の保証には定期的な研修制度が不可欠であると考え。通訳者のスキルアップは日頃の自主トレーニングが必要不可欠であり、研修参加者にその大切さを確認してもらう必要があると考える。

本研究班はこのような現状を踏まえ、これまでの研修の経験を活かして⁴⁾、本研修は遠隔通訳のための通訳基礎トレーニングとロールプレイ演習を組み合わせた構成とした。本研修参加者が通訳基礎トレーニングの技術を取得し、遠隔通訳にも対応できるような練習に主体的に取り組む習慣をつけてもらうことと同時に、ロールプレイ演習に参加し現場に出る自信をつけてもらうことを目的としている。

B. 研究方法

感染症医療通訳研修の内容構成は大きく二つの部分に分かれる。Ⅰ部は関連医療基礎知識に関する講義で、座学の形で進める。Ⅱ部は遠隔医療通訳の技術向上を目的とする講義と演習を組み合わせた参加型の研修である。本報告書はⅡ部の通訳技法習得及びロールプレイ演習を扱う。

1. 感染症医療通訳研修全体の内容構成

研修の企画運営は感染症通訳派遣を担ってきた「CHARM」と「MIC かながわ」に業務委託し、すべて ZOOM による遠隔開催で実施した。研修

内容の構成は HIV・結核に関する基礎知識の座学を受講したうえで、通訳技法、ロールプレイ演習を行う流れに設定している。CHAM と MIC かながわがそれぞれ実施された内容構成は以下にまとめる。

(1) 「CHARM」を通じた研修

全 4 回構成で実施した。さらに座学で扱いきれない関連知識の講義を録画し、視聴研修を新たに加えた。

●第 1 回：医療基礎知識

- ・実施日：2023 年 9 月 2 日(土) 9：00～14：00
 - ・受講者数：14 名（7 言語）
 - ・通訳言語：英語 11、中国語 1、韓国朝鮮語 1、ミャンマー語 1、ベトナム語 1、タガログ語 1、ネパール語 1 名
 - ・研修内容
- ① 「感染症 1」 HIV とは？～HIV 医療の実際～
（講師：大阪市立総合医療センター感染症内科医師・白野倫徳）
 - ② 「感染症 2」結核（Tuberculosis: TB）～医療通訳研修～
（講師：大阪市保健所感染症対策課医師・井村元気、保健師・森本哲生）
 - ③ 通訳倫理（講師：手話通訳者・元大阪はびきの医療センター通訳コーディネーター 岩田美加）

●第 2 回：医療通訳基礎技能の紹介と演習

- ・実施日：2023 年 10 月 14 日(土) 9：45～13：40
 - ・受講者数：23 名（7 言語）
 - ・通訳言語：英語 14 名+第二言語として英語を上げたフィリピン語 1 名、ベトナム語 1 名、中国語 5 名、韓国語 1 名、ミャンマー語 1 名
 - ・研修内容
- ① 通訳基礎トレーニング法の紹介と演習（講師：杏林大学外国語学部教授 宮首弘子）
 - ② 言語別通訳技能に関するグループワーク(英語 3 グループ、中国語/韓国語+ミャンマー語

グループ各 1)

●第 3 回：少数言語通訳研修

- ・実施日：2023 年 12 月 16 日(土) 9:45～12:00
- ・受講者数：4 名
- ・通訳言語：フィリピン語 1、ネパール語 1、英語 1、ベトナム語 1、英語 1

・研修内容

- ① ネパール語、フィリピン語研修(HIV 検査)
- ② CHARM スタッフと質疑応答

●第 4 回：感染症ロールプレイ通訳演習

- ・実施日：2024 年 1 月 13 日(土) 9:00～13:00
- ・受講者数：19 名
- ・通訳言語：英語 9 名、中国語 4 名（見学 6 名：英語 3 名、ベトナム語 1 名、タガログ語 1 名、ミャンマー語 1 名）

・研修内容：

- ① 感染症通訳のためのロールプレイ演習(対象言語：中国語、英語)
- ② HIV 検査時、結果返し(陽性告知)場面での受検者と保健師の間の通訳

※視聴研修：研修時間が限られているため、「HIV の基礎知識」、「感染症に関わる社会保障制度と外国籍住民」、「通訳者のための PrEP 入門」は録画して、参加者に自由に視聴できるように設定した。

(2) 「MIC かながわ」を通じた研修

以下の通り 2 回構成で実施した。

●第 1 回：感染症通訳のための基礎講座①

- ・実施日：2024 年 1 月 20 日 (土) 9:30～12:40
- ・受講者数：50 人 (14 言語)
- ・通訳言語：英語 19、中国語 4、タイ語 3、スペイン語 7、ポルトガル語 4、ベトナム語 4、フランス語 5、フィリピン (タガログ) 語 2、ウクライナ語 1、インドネシア語 1、カンボジア語 1、ネパール語 1、ミャンマー語 1、ロシア語 1 (重複登録あり)

・研修内容

- ① 結核の基礎知識 (結核予防会 総合健診推進センター医師 高柳喜代子)
- ② エイズの基礎知識 (大阪市立総合医療センター感染症内科医師 白野倫徳)

●第 2 回：感染症通訳のための基礎講座②

- ・実施日：2024 年 1 月 27 日 (土) 9:30～15:00 (12:20～13:50 休憩)

・受講者数：45 人 (14 言語)

・通訳言語：英語 17、中国語 4、タイ語 3、スペイン語 7、ポルトガル語 4、ベトナム語 4、フランス語 4、フィリピン (タガログ) 語 1、ウクライナ語 1、インドネシア語 1、カンボジア語 1、ネパール語 1、ミャンマー語 1、ロシア語 1 (重複登録有)

・研修内容

- ① 医療機関からみた 医療通訳の注意点 (港町診療所所長 沢田貴志)
- ② セクシュアリティについて (文化人類学者 砂川秀樹) ※研修当日に登壇できなかったため、後日 PDF 資料を配布し、2 月 2 日～2 月 15 日 YouTube で講義動画を限定公開配信した。(閲覧数：71)
- ③ 通訳技術の基本と基礎演習 (杏林大学外国語学部教授 宮首弘子)
- ④ HIV 検査での会話の実際 (港町診療所所長 沢田貴志)

2. 医療通訳技術研修の流れ

上記 1. は感染症医療通訳研修の研修内容構成の全貌であるが、本報告では医療通訳技術を向上するための研修項目に焦点をあて、医療通訳基礎技術演習 (I 部) 及び医療通訳ロールプレイ演習 (II 部) を取り扱う。具体的な項目・内容の整理は表 1 の通りである。

表 1. 医療通訳技術向上のための研修項目

	項 目	内 容	方法	CHARM	MICかながわ
I 部	医療通訳心得と要領の講義	・医療通訳の役割と心得 ・HIV検査の基礎と流れ	・Zoomによるリモート一斉講義	第4回	第2回
	通訳基礎技術の講義・演習	・シャドーイングの練習法と実践 ・リプロダクションの練習法と実践 ・記憶とノートテイク法の実践 ・言語別グループワーク	・Zoomによるリモート一斉講義	第2回	第2回
II 部	医療通訳ロールプレイ演習 (実演2回)	・演習要領 ・役割の指定とグループ分け ・各参加者ロールプレイ実演 ・参加者相互の実演見学 ・研修成果の共有と質疑応答	・Zoomによるリモート一斉講義 ・Zoom Breakout Rooms によるリモートグループワーク ・Zoomによるリモート一斉講義	第4回	未実施

3. 医療通訳基礎技術に関する演習

医療通訳技術研修 I 部の通訳基礎トレーニングに関する演習は、通訳に必要なスキルを如何に身につけ、なおかつスマホやパソコンを活用して日々向上していくかの方法論を紹介して、演習を通して習得してもらうのが狙いである。

研修の内容は、

- ① 医師の視点から見る医療通訳者の役割と心得及び注意点に関する講義。
- ② 専門用語の解説
- ③ 医療通訳者を養成する観点から通訳スキルを習得と向上するための方法論に関する講義
- ④ 通訳基礎トレーニングとロールプレイの指導

①は研究班の沢田が医師の立場から、医療通訳に求める役割とは何か、医療現場では遠隔通訳する際にどのような注意点があるかを教えるものである。医療現場での遠隔通訳への需要の高まり、遠隔通訳の種類、遠隔通訳の長所と短所、遠隔通訳ならではの注意点について、現場の医師および医療通訳者の生の体験を踏まえて紹介しつつ、ケーススタディの形で遠隔通訳の難しさと工夫すべきところ（ノウハウ）を、演習を交えながら講義した。

②は沢田医師が HIV 検査現場で頻繁に用いる専門用語や検査方法を丁寧に解説する。医師や保健師と患者の会話の実際を取り上げて、わかりやすく説明することで、受講者に専門用語への理解を

深めてもらうのが狙いである。

③、④は、医療通訳養成を専門分野とする宮首が通訳者養成の観点から各種通訳基礎トレーニング法の講義と演習である。ボランティア通訳者の多くが通訳訓練を十分に受けていないことを踏まえて、基礎となるシャドーイング、リプロダクション、クイック・レスポンス、ノート・テイキングなどのトレーニング方法が如何に日頃自宅でスマホやパソコンを使って取り込むかを、HIV や結核の専門用語やフレーズの音声ファイルを用いて練習し、訓練法を体得してもらう。さらに、Zoom のブレイクアウト・ルーム機能を使って、通訳言語別にグループ学習を行った。これらの練習を通して、自宅でも、一人でも手軽に練習して、通訳のスキルアップができることを体感してもらった。

4. 医療通訳ロールプレイ演習

医療通訳技術研修 II 部のロールプレイ演習は、3つの狙いがある。

- ① 現場経験のないもしくは不十分な参加者に現場を模擬体験することによって、自身の通訳能力や現場対応力の確認と向上を図る。
- ② 自分の通訳ぶりを講師や他の通訳仲間に見てもらい、評価してもらう。
- ③ 他の方の通訳ぶりを見学して、良いところを取り入れ、不足なところに気づくといった自

己研鑽の資とする。

ロールプレイ演習の実施は遠隔通訳現場の再現を意識して、医療者役と患者役は研修主催側が用意した会議室で対面によるロールプレイを行い、研修参加者は医療通訳者として、Zoom を通じて遠隔通訳を行う形でロールプレイ通訳演習を進めた。

ロールプレイ演習用のシナリオは、令和3年はHIVの医療現場でのニーズの高いHIV医療費に関するシナリオを新規作成した。今年度は研究班が実施している外国人を対象とするHIV検査会からわかったニーズを踏まえて、検査時の医療者と患者のやりとりを取り上げて、研究班沢田医師が新規に作成したものである。新規シナリオ「検査事業カウンセリング告知」の場面設定は、HIV検査に訪れる外国人が、検査に関するカウンセリング告知を受ける場面としている。検査を受けるきっかけを聞くことから始まり、各種検査に関する説明、感染リスクの高い性行為やPrEPの正しい使い方、さらにHIV感染の告知および在留資格、健康保険、治療に関する相談を盛り込んだシナリオである。

研修参加者には事前情報として、上記のシナリオの場面設定および関連する専門用語を1週間前文字ファイルと音声ファイルにして知らせて、専門知識の事前調べや用語のクイック・レスポンスなどの自主学習をしてもらった。

ロールプレイ演習の医療者役と患者役は「MICかながわ」や「CHARM」のベテラン医療通訳者に依頼し、現場の雰囲気醸成した。

実施方法については、少人数の相互学習効果を狙って、言語別少人数での実施とした。実施言語は現場のニーズに応じるものとした。「CHARM」は現場需要の圧倒的に多い英語と中国語の2言語を選び実施し、17名が参加した。「MICかながわ」は今年度研修運営を担当する事務局のマンパワーの関係で実施を見送った。

実施の流れは、シナリオを参加者の人数分に均等に分けて、参加者1人に2ページ程度のシナリオを通訳する形をとって進めた。各参加者は同じシナリオを二回実演するように設定し、1回目よ

りも2回目改善できたかを実感してもらうねらいである。

5. 評価方法

ロールプレイ演習では、通訳に求められる基本的能力を正確性と迅速性の両軸から捉える評価法を組み合わせた。リモートでの実施を考慮に入れ、令和3年度より取った簡略の減点方式による評価方法を今年度も踏襲した。

具体的には、通訳の正確性を測るためには、評価ポイントを数値化し、できなかったところを減点する、という簡便な減点方式を採用した。各言語、各グループの指導スタッフはこの統一した評価シートを用いて、参加者の通訳パフォーマンスを採点しながら、具体的に問題点を指摘し、改善の方法をアドバイスする。

通訳の迅速性を測るためには、タイムキーパーを設けて、1回目と2回目それぞれ通訳の所要時間を測り、秒数まで測定して記録することにした。通訳の所要時間を測ることによって、1回目と2回目どれほど時間短縮できたかを可視化し、数値化されたプロセスを通じて、参加者に目に見える研修成果を実感してもらうのが狙いである。

研修の有効性の確認のため、研修参加者に対し、研修に関するアンケート調査（別紙1、2）を実施した。アンケートは半構造化質問形式で、有効性の程度の評価と自由所感を収集した。アンケートはFormsを利用したオンラインによるアンケート配信と集計で、研修当日ではなく、後日のアンケート集計となったため、参加者の全数の集計とはならなかった。

（倫理面への配慮）

すべてのアンケート調査は、当研究班代表者が所属する杏林大学大学院国際協力研究科の研究倫理委員会から承認を得ている。また、ロールプレイの録画への参加は任意であることを事前に説明し、調査参加の同意を得て実施した。

C. 研究成果

1. 研修参加者の属性

研修参加者数は「MIC かながわ」が I 部・通訳基礎トレーニング演習 45 名、その内 31 名から回答を得た。「CHARM」は I 部・通訳基礎トレーニング演習 23 人で、その内 22 名から回答を得た。2 部・ロールプレイ演習 19 名で、全員から回答を得た。(表 2)。

表 2. 研修参加者のプロフィール

		MIC かながわ		CHARM		通訳基礎計		ロールプレイ計	
		通訳基礎	ロールプレイ	通訳基礎	ロールプレイ	人	割合 (%)	人	割合 (%)
		31	0	22	19	53		19	
性別	男	2		4	3	6	11.3	3	15.8
	女	29		18	16	47	88.7	16	84.2
	その他					0	0.0	0	0.0
母語	日本語	25		15	13	40	75.5	13	68.4
	中国語	2		5	4	7	13.2	4	21.1
	ベトナム語	0		0	0	0	0.0	0	0.0
	英語	0		1	1	1	1.9	1	5.3
	ネパール語	1		0	0	1	1.9	0	0.0
	タイ語	1		0	1				
	フィリピン語	1		1	0				
年齢	フランス語	1		0	0	1	1.9	0	0.0
	20才未満	0		0	0	0	0.0	0	0.0
	20～29才	0		4	2	4	7.5	2	10.5
	30～39才	1		4	3	5	9.4	3	15.8
	40～49才	7		4	3	11	20.8	3	15.8
	50～59才	9		6	5	15	28.3	5	26.3
	60才以上	14		4	6	18	34.0	6	31.6
学歴	高校卒	1		1	1	2	3.8	1	5.3
	大学卒	19		15	15	34	64.2	15	78.9
	大学院卒	10		3	1	13	24.5	1	5.3
	短大	1		1	1	2	3.8	1	5.3
	専門学校	0		2	1	2	3.8	1	5.3
所属	NPO団体	17		4	6	21	39.6	6	31.6
	国際交流協会	14		2	2	16	30.2	2	10.5
	病院	4		5	2	9	17.0	2	10.5
	民間企業	2		1	2	3	5.7	2	10.5
	フリーランス	8		7	5	15	28.3	5	26.3
	学生	1		2	0	3	5.7	0	0.0
	なし	0		1	2	1	1.9	2	10.5
日本在住年数	日本で育った	21		15	13	36	67.9	13	68.4
	1年未満	0		3	2	3	5.7	2	10.5
	1～5年	0		1	0	1	1.9	0	0.0
	6～10年	0		0	0	0	0.0	0	0.0
	11年以上	10		3	4	13	24.5	4	21.1
医療通訳件数	ない	9		12	9	21	39.6	9	47.4
	10件以下	3		1	0	4	7.5	0	0.0
	11～50件	6		6	3	12	22.6	3	15.8
	51～100件	3		1	1	4	7.5	1	5.3
	101件以上	10		2	6	12	22.6	6	31.6
遠隔通訳経験	ない	20		16	9	36	67.9	9	47.4
	ある	11		6	10	17	32.1	10	52.6
結核患者通訳経験	ない	21		18	14	39	73.6	14	73.7
	ある	10		4	5	14	26.4	5	26.3
HIV患者通訳経験	ない	24		19	12	43	81.1	12	63.2
	ある	7		3	7	10	18.9	7	36.8

母語別では、I 部と II 部でそれぞれ日本語母語話者が約 75.5%、64.8% 占め、最も多く、中国語母語話者が 13.2%と 21.1%と次、日本語母語話者と中国語母語話者の研修参加意欲が際立つ結果となった。一方では、英語母語話者が約 1.9%と 5.3%で、その他の言語はいずれもごくわずかである。日本在住期間は日本語ネイティブ以外では 11 年超がもっとも多く、24.5%と 21.1%である。

年齢別では、20 代 7.5%と 10.5%、30 代 9.4%と 15.8%、40 代 20.8%と 15.8%、若い世代の受

講は昨年度の 2 割超より増え、約 4 割である。一方では 50 代は 28.3%と 26.3%、60 歳以上は 34.0%と 31.6%で最も多く、50 代以上の参加者が 6 割以上を占めていることがわかった。わずかに昨年度より若い世代の参加者が増えた。

学歴別では、大学卒が 64.2%と 78.9%、大学院卒が 24.5%と 5.3%で、合わせて 8 割超え、高学歴の参加者が多いことがわかった。

研修参加者の所属は、NPO 団体が 39.6%と 31.6%、国際交流協会が 30.2%と 10.5%で、合わせて 6 割と 4 割を占める。病院が 17.0%と 10.5%で、医療者の参加が増えつつある。主な所属団体は、SEMI さっぽろ、エスニコ、MIA (宮城県国際化協会)、AIRA (我孫子市国際交流協会)、SHARE、MIC かながわ、とやま国際センター、富山県通訳案内士協会、OFIX (大阪府国際交流財団)、FACIL、SIC(しまね国際センター)他。日本各地から参加者が集まった。さらにフリーランス 28.3%と 26.3%で、現役の通訳者の積極的参加が見られた。また、民間企業所属や医療通訳に関心のある学生の参加があった。

医療通訳経験では参加者の 4 割～5 割が未経験か経験 10 件以下であった。11～50 件までは 22.6%と 15.8%で約 2 割、101 件以上 22.6%と 31.6%で、2 割～3 割がかなり経験を持つ参加者もいることが分かった。

また遠隔通訳経験は 67.9%と 47.4%未経験で、経験者も 32.1%と 52.6%あり、遠隔通訳のニーズが増えつつあると思われる。結核患者通訳経験者は 2 割超で、HIV 患者通訳経験者は 2 割弱～3 割超である。総じて通訳経験者の受講が増えていると言える。

参加者の通訳言語は、「MIC かながわ」の通訳技法研修では、英語、中国語、タイ語、スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語、フランス語、フィリピン (タガログ) 語、ウクライナ語、インドネシア語、カンボジア語、ネパール語、ミャンマー語、ロシア語 (重複登録有) 計 14 言語であった。「CHARM」の研修では、1 部の通訳技法は 7 言語で、2 部のロールプレイ演習の扱う言語は英語と中国語に限定したが、見学者は英語に加えて、

ベトナム語、タガログ語、ミャンマー語の参加があった(表3)。

表3. 通訳言語別研修参加者

	MICかながわ	大版CHARM		通訳基礎計		ロールプレイ計			
		通訳基礎	ロールプレイ	通訳基礎	ロールプレイ	人	割合	人	割合
担当言語 (複数言語 対応者含む)	英語	31	0	22	19	53	56.6	11	57.9
	中国語	3		5	4	8	15.1	4	21.1
	韓国語			1		1	1.9	0	0.0
	ベトナム語			1	1	1	1.9	1	5.3
	ネパール語	1				1	1.9	0	0.0
	フィリピン語	1		1	1	2	3.8	1	5.3
	タイ語	1				1	1.9	0	0.0
	スペイン語	6				6	11.3	0	0.0
	カンボジア語	1				1	1.9	0	0.0
	ミャンマー語			1	1	1	1.9	1	5.3
	インドネシア語	1				1	1.9	0	0.0
	マレー語				1	0	0.0	1	5.3
フランス語	3				3	5.7	0	0.0	

2. 通訳基礎技術演習の成果

(1) 通訳技法に対する認識と研修の有効性

研修後のアンケートを通して、通訳基礎トレーニングにおける通訳技法の講義と演習によって研修参加者の通訳技法の認識が前進したかどうかを確認した(表4)。

表4. 通訳基礎技術演習の有効性

属 性	効 果	MIC	CHARM	参加者合計	
		かながわ		人	割合%
「シャドーイング」 技法を知っていたか	知らない	3	2	5	9.4
	聞いたことがある	7	2	9	17.0
	多少練習したことある	16	12	28	52.8
	よく練習している	5	6	11	20.8
	強くそう思う	15	13	28	52.8
「シャドーイング」 練習の有効性	そう思う	14	9	23	43.4
	どちらかといえばそう思う	2	0	2	3.8
	どちらかといえばそう思わない	0	0	0	0.0
	まったく思わない	0	0	0	0.0
	強くそう思う	7	7	14	26.4
「クイックレスポンス」 技法を知っていたか	知らない	4	0	4	7.5
	聞いたことがある	15	9	24	45.3
	多少練習したことある	5	6	11	20.8
	よく練習している	21	18	39	73.6
	強くそう思う	8	4	12	22.6
「クイックレスポンス」 練習の有効性	そう思う	2	0	2	3.8
	どちらかといえばそう思う	0	0	0	0.0
	どちらかといえばそう思わない	0	0	0	0.0
	まったく思わない	0	0	0	0.0
	強くそう思う	5	7	12	22.6
「リプロダクション」 技法を知っていたか	知らない	10	1	11	20.8
	聞いたことがある	14	9	23	43.4
	多少練習したことある	2	5	7	13.2
	よく練習している	20	17	37	69.8
	強くそう思う	10	5	15	28.3
「リプロダクション」 練習の有効性	そう思う	1	0	1	1.9
	どちらかといえばそう思う	0	0	0	0.0
	どちらかといえばそう思わない	0	0	0	0.0
	まったく思わない	0	0	0	0.0
	強くそう思う	5	4	9	17.0
「ノートテイク」 技法を知っていたか	知らない	5	3	8	15.1
	聞いたことがある	13	7	20	37.7
	多少練習したことある	8	7	15	28.3
	よく練習している	21	15	36	67.9
	強くそう思う	9	7	16	30.2
「ノートテイク」 練習の有効性	そう思う	1	0	1	1.9
	どちらかといえばそう思う	0	0	0	0.0
	どちらかといえばそう思わない	0	0	0	0.0
	まったく思わない	0	0	0	0.0
	とても効果的	10	4	14	26.4
リモートによる研修と 対面研修の効果比較	効果的	11	8	19	35.8
	変わらない	9	9	18	34.0
	困難	1	1	2	3.8
	とても困難	0	0	0	0.0
	移動等時間ロスがない	30	18	48	90.6
リモート研修のメリット (複数選択可)	リラックスして集中しやすい	14	14	28	52.8
	遠隔でも参加可能	30	19	49	92.5
	感染リスクがない	17	13	30	56.6
	グループ分けが容易	14	10	24	45.3
	チャット機能は便利	16	10	26	49.1
	通信環境不安定	5	7	12	22.6
	通信機器使い慣れない	7	3	10	18.9
リモート研修のデメリット (複数選択可)	意見交換困難	9	3	12	22.6
	参加者間の交流困難	18	9	27	50.9
	集中力持続困難	2	6	8	15.1
	質問困難	1	1	2	3.8

「各種通訳技法を知っていたか」は、「知らない」と答えた参加者がシャドーイングは9.4%、昨年度の14%より下がった。クイック・レスポンスは26.4%、昨年度の17.5%より割合が高い。リプロダクションは22.6%、昨年度の28.1%より下がった。ノート・テイキングは17.0%で、昨年度の14%より割合が高い。総じてみれば、基本的な通訳訓練を全く受けている参加者が依然として一定数いることが明らかになった。

各種通訳技法を「聞いたことがある」と回答した参加者は、シャドーイング17.0%、昨年度の21.1%より減少した。クイック・レスポンス7.5%、昨年度の29.8%よりかなり少ない。リプロダクション20.8%、昨年度の24.6%より微減。ノート・テイキング15.1%、昨年度の24.6%より少ない。約1割～3割弱の参加者が基本的な通訳技法を聞いたことがある程度に留まっていることがわかった。つまり約半数の参加者は医療通訳に必要な基礎訓練法を全く知らないか、または聞いたことがある程度で、通訳スキルを取得しているとは言えない状態で、通訳養成講座を継続して受ける必要があると言わざるを得ないと考える。

「多少練習したことがある」「よく練習している」と回答した参加者は、シャドーイング52.8%と20.8%で、昨年の50.9%と14%よりは増えた。クイック・レスポンス45.3%と20.8%で、昨年度の36.8%と15.8%より多い。リプロダクション43.4%と13.2%で、昨年度は36.8%と10.5%である。ノート・テイキング37.7%と28.3%で、昨年度は43.9%と17.5%である。依然として通訳の基礎トレーニングを日頃持続的に取り組んでいるとは言い難いことが浮き彫りになった。

一方では「シャドーイング」等の各種通訳技法の有効性については、両研修ともに「強くそう思う」「そう思う」が9割を越え、昨年度の80%超よりも1割増えて、研修効果が認められた。

(2) リモートによる講義と演習の効果

リモートによる研修の効果は対面による研修と比較して、参加者はそのメリット・デメリット

をどのように評価したかを今年度も研修後のアンケートで確認した（表5）。

表5. リモート実施の有効性とメリット・デメリット

属性	効果	MIC	CHARM	参加者合計	
		かながわ		人数	割合%
		31	22	53	
リモートによる研修と対面研修の効果比較	とても効果的	10	4	14	26.4
	効果的	11	8	19	35.8
	変わらない	9	9	18	34.0
	困難	1	1	2	3.8
	とても困難	0	0	0	0.0
リモート研修のメリット（複数選択可）	移動等時間ロスがない	30	18	48	90.6
	リラックスして集中しやすい	14	14	28	52.8
	遠隔でも参加可能	30	19	49	92.5
	感染リスクがない	17	13	30	56.6
	グループ分けが容易	14	10	24	45.3
	チャット機能は便利	16	10	26	49.1
リモート研修のデメリット（複数選択可）	通信環境不安定	5	7	12	22.6
	通信機器使い慣れない	7	3	10	18.9
	意見交換困難	9	3	12	22.6
	参加者間の交流困難	18	9	27	50.9
	集中力持続困難	2	6	8	15.1
質問困難	1	1	2	3.8	

対面による研修と比較した有効性については、両研修ともに参加者からは、「とても効果的」「効果的」とする評価を26.4%と35.8%で、「変わらない」34.0%を加えると96.2%で、昨年(96.5%)同様9割以上からポジティブな評価を得た。それに対し、「困難」は2名で、「とても困難」はゼロ回答であった。リモートに慣れてきたことが明らかになった。

具体的なリモートによる研修のメリットとして、9割超の参加者が「移動等時間ロス不要」、「遠隔地でも参加可能」を挙げ、5割以上「感染リスクがない」、「リラックスして集中しやすい」を挙げた。4割超「グループ分けが容易」、5割弱「チャット機能は便利」と評価し、リモートの機能面での肯定的意見が増え、ポジティブな評価が年々増えてきたことを確認した。

デメリットとしては、昨年、一昨年同様³⁾「参加者間の交流困難」を50%超の参加者が指摘し、その他2割超が「意見交換困難」を挙げ、15.1%が「集中力持続困難」を挙げた。また、リモートの機能面で約22.6%の参加者が「通信環境不安定」を指摘し昨年度の35.1%より減少したが、18.9%が「通信機器使い慣れない」を指摘し、昨年度の14%より増えた。改善すべき点として3.8%と極少数の参加者から「質問困難」が挙げられたが、昨年度の12.3%より大幅に少なくなった。リモ

ートに慣れてきたことがわかった。

3. ロールプレイ演習の成果

(1) ロールプレイの改善効果

ロールプレイ演習では、各参加者が2回実演し指導を受けて改善してゆくように設計している。通訳力の改善効果は、正確性(減点)と迅速性(所要時間)について2回の実演の差として認識することができる(表6)。

表6 ロールプレイ演習の改善効果

実施担当	参加者	通訳語	担当シナリオ	1回目	2回目	正確性改善率	1回目	2回目	迅速性改善率		
				減点(A)	減点(B)		所要時間(C)	所要時間(D)		(C-D)/C	
CHARM N=11	1	英語	HIV検査①	10	3	0.70	7分28秒	448	7分40秒	460	-0.03
	2	英語	HIV検査③	12	4	0.67	9分24秒	564	8分02秒	482	0.15
	3	英語	HIV検査④	12	4	0.67	7分49秒	469	6分35秒	395	0.16
	4	英語	HIV検査①	10	5	0.50	23分14秒	1394	7分00秒	420	0.70
	5	英語	HIV検査②	5	2	0.60	10分15秒	615	7分00秒	420	0.32
	6	英語	HIV検査③	7	2	0.71	19分15秒	1155	7分00秒	420	0.64
	7	英語	HIV検査④	8	2	0.75	8分23秒	503	7分00秒	420	0.17
	8	中国語	HIV検査①	10	7	0.30	8分58秒	538	5分03秒	303	0.44
	9	中国語	HIV検査②	5	2	0.60	8分53秒	533	7分05秒	425	0.20
	10	中国語	HIV検査③	4	2	0.50	7分02秒	422	5分58秒	358	0.15
	11	中国語	HIV検査④	8	6	0.25	10分00秒	600	5分37秒	337	0.44
平均						0.57					0.30

表6からわかるように、正確性を問う減点は、全員が改善し、平均0.57の改善率である。最も高い改善率は0.75で、最も低いのは0.25で、全員から改善が見られ、1回目に訳せなかった箇所、訳し漏れした箇所など適確に訳せるようになり、自身の上達を実感できたとと言える。

迅速性を問う通訳の所要時間は、1名除いて全員時間を短縮できた。平均短縮率は0.30で、一定の改善効果が認められた。

なお、研修時間が限られているため、人数の多い(6人)グループでは、ロールプレイ演習2回目が途中で終わった参加者が2名いて、2回目のデータは取れなかった。

研修後のアンケートを通して、ロールプレイの有効性を研修参加者がどのように評価したかを確認した(表7)。

表7 ロールプレイ演習の有効性

属性	効果	MIC かながわ	CHARM		参加者合計	
			19	19	割合%	割合%
研修の流れ	とても良い		13	13	68.4	
	良い		5	5	26.3	
	普通		1	1	5.3	
	悪い		0	0	0.0	
	とても悪い		0	0	0.0	
専門用語の理解の深まり (1回目に対する2回目)	強く思う		8	8	42.1	
	そう思う		9	9	47.4	
	どちらかといえばそう思う		2	2	10.5	
	どちらかといえばそう思わない		0	0	0.0	
	まったく思わない		0	0	0.0	
患者への対応能力の向上 (1回目に対する2回目)	強く思う		8	8	42.1	
	そう思う		7	7	36.8	
	どちらかといえばそう思う		3	3	15.8	
	どちらかといえばそう思わない		1	1	5.3	
	まったく思わない		0	0	0.0	
医療者への対応能力の向上 (1回目に対する2回目)	強く思う		7	7	36.8	
	そう思う		8	8	42.1	
	どちらかといえばそう思う		3	3	15.8	
	どちらかといえばそう思わない		1	1	5.3	
	まったく思わない		0	0	0.0	
メモ取りの要領の向上	強く思う		3	3	15.8	
	そう思う		6	6	31.6	
	どちらかといえばそう思う		7	7	36.8	
	どちらかといえばそう思わない		2	2	10.5	
	まったく思わない		1	1	5.3	
他参加者の実演を参考 (1回目に対する2回目)	強く思う		14	14	73.7	
	そう思う		4	4	21.1	
	どちらかといえばそう思う		1	1	5.3	
	どちらかといえばそう思わない		0	0	0.0	
	まったく思わない		0	0	0.0	
医療者発話と患者発話の 通訳困難度比較	医療者の発話の通訳がずっと難しい		8	8	42.1	
	どちらかといえば医療者の発話の通訳が難しい		4	4	21.1	
	どちらも同じ程度に難しい		4	4	21.1	
	どちらかといえば患者の発話の通訳が難しい		3	3	15.8	
	患者の発話の通訳がずっと難しい		0	0	0.0	

「研修の流れ」は、両研修の参加者から9割以上「とてもよい」「良い」評価を受けた。「他参加者の実演を参考」も90%超の「とても参考になる」「参考になる」評価を受けた。

「専門用語の理解の深まり」が「強く思う」と「そう思う」を合わせて約9割弱と高く評価し、「医療者対応能力」「患者対応能力」の向上については、「強く思う」と「そう思う」を合わせて7割以上から評価を得た。

「メモ取り要領の向上」については、「向上した」以上の評価が合わせて5割弱であり、リモートではメモ取り要領の指導が伝わりにくく、限界があると言わざるえないが、指導回数や時間を増やすなど、工夫する余地があると考えられる。

「医療者と患者の通訳対応の困難度」については、「医療者の通訳対応が難しい」が42.1%超で、「患者対応が難しい」15.8%に比べてかなり開きがあった。医療知識の理解と蓄積が不十分に起因する可能性があると考えられる。一方では、「どちらも同等に難しい」と感じた参加者が2割に及んだ。

(2) リモートによる演習の効果

リモートによるロールプレイ演習の有効性を、研修参加者への研修後アンケートで確認した(表8)。

表8. ロールプレイ演習のリモート実施の有効性とメリット・デメリット

属性	効果	MIC かながわ	CHARM		参加者合計	
			19	19	割合%	割合%
ロールプレイ実演の 遠隔通訳と対面通訳の 効果比較	遠隔通訳がとても効果的		6	6	31.6	
	遠隔通訳が効果的		7	7	36.8	
	変わらない		4	4	21.1	
	遠隔通訳が困難		2	2	10.5	
	遠隔通訳がとても困難		0	0	0.0	
リモート研修による ロールプレイ実演の メリット (複数選択可)	移動等時間ロスがない		17	17	89.5	
	リラックスして集中しやすい		7	7	36.8	
	遠隔でも参加可能		17	17	89.5	
	感染リスクがない		8	8	42.1	
リモート研修による ロールプレイ実演の デメリット (複数選択可)	音声聞き取り容易		4	4	21.1	
	録画機能は便利		4	4	21.1	
	通信環境不安定		5	5	26.3	
	通信機器使い慣れない		3	3	15.8	
リモート研修による ロールプレイ実演の デメリット (複数選択可)	表情等の情報入手困難		8	8	42.1	
	区切りのタイミング困難		5	5	26.3	
	臨場感・緊張感低い		4	4	21.1	
	ニュアンス伝達困難		4	4	21.1	
	表情等の情報入手困難		8	8	42.1	

研修参加者からは、「とても効果的」「効果的」とする評価は31.6%と36.8%で、「変わらない」21.1%を含めると、実に92.5%がポジティブな評価をした。一方で、「とても困難」はゼロ回答だが、「困難」との回答は約10.5%あり、引き続き改善する余地がある。

具体的なメリットとして、「移動等時間ロス不要」89.5%、「遠隔地でも参加可能」89.5%、「感染リスクがない」42.1%が指摘されている。これは1部の通訳基礎演習に共通する意見である。また「リラックス・集中できる」「音声聞き取り容易」「録画機能は有効」などリモートの機能面での肯定的意見もあった。

デメリットとしては、最も多く指摘されたことは「表情等の情報入手困難」42.1%、次に多いのは「通訳の区切りのタイミング困難」が約26.3%である。同様に、難しい点として、「ニュアンス伝達困難」21.1%、「臨場感・緊張感低い」21.1%等が挙げられた。リモートの機能面で「通信環境不安定」が26.3%の参加者に指摘された。

全体として、リモートによるロールプレイ演習については、参加者の多くは操作に慣れてきて、メリットを実感している。一方では、引き続きよりよい実施を工夫したいと考える。

D. 考察

1. 通訳技法の習得が依然として課題

各種の医療通訳研修では医療者から必ず言われるのは「足さず引かず、そのまま全部訳す」という言葉である。このような医療者の求める通訳像に近づくためには、高度な通訳スキルと経験が必要とされる。通訳スキルを高めるには基礎トレーニング法を習得し、自主的に取り組むことで上達につながるものである。それゆえ研修目的を通訳技法の習得に設定したことは妥当だと考える。

研修参加者のアンケートの回答から見れば、基礎的な通訳スキルを身につけるためのトレーニング法については、1割から2割以上の参加者が知らない、とりわけクイック・レスポンスが26.4%、ノート・テイキングは17.0%が知らないと答え、通訳の質に影響を与えと言わざるを得ない。また、各種通訳基礎トレーニング法を聞いたことがあるのは1割～3割程度に留まっている。つまり、約半数の参加者が基礎的な通訳技法の習得が必要であることが今年度もデータから判明した。

さらに、基礎的な通訳トレーニングを日頃自主的に行っている参加者は、トレーニングの種類によって1割～2割程度しかないことが明らかになった。通訳スキルを高めるために日々の自己研鑽が不可欠で、意識改善が必要だと考える。

一方では、50代以上の参加者が6割以上を占め、短期記憶と迅速な言葉の置き換えを求められる通訳にとっては、不利な面があると言える。それを補うのは通訳基礎トレーニングを持続的に取り組むことである。しかし、高齢者ほどスマホやパソコンなどの電子機器の操作に疎く、若い世代以上時間をかけて練習する必要があると言える。したがって、参加者個人がスマホやパソコンを使って、自宅でも取り組める訓練法を紹介し、身近なものを使って、手軽にできる練習法の習得が有効だと考える。

上記のことを踏まえると、スマホやパソコンを活用した通訳技法の習得と自主トレの啓発を研修目的とすることは適切である。しかし、技能の習得は定期的な研修と持続的な取り組みが重要

であるため、今後も根気よくこのような研修を提供し続ける必要があると考える。

2. ロールプレイ通訳演習の効果と課題

医療通訳の質を確保するためには、通訳力はもちろんのこと、多様な医療現場を知るという現場力も重要だと言える。従って本演習の目的は、通訳力と現場力の向上にポイントを置く。具体的にはHIVや結核という感染症の医療現場を疑似体験することによって、未経験或いは経験不足からくる心理的ストレスを軽減し、医療従事者や患者への対応の要領を体感して修得してもらうことである。また、Zoomによる遠隔通訳の形で実施することで、遠隔通訳の現場も体験してもらい、遠隔通訳ならではの難しさを理解しその対応能力の修得という目的を付け加えた。

アンケートの回答から見れば、約半数の参加者は未経験か経験が少ない状況であり、HIVや結核の現場経験者は2割～3割に止まる。経験不足から現場に出る自信が持てない方の後押しをするには、ロールプレイ演習が効果的な方法だと考える。

通訳力の向上については、通訳の正確性と迅速性において、指導スタッフの評価記録からほぼすべての参加者に成長が見られた。医療者や患者への対応の要領は、研修後のアンケートの回答によると、研修の流れや各種の技能向上は8割ないし9割の参加者がとても効果的、或いは効果的だと高評価である。

また、リモートによるロールプレイ通訳演習は、Zoom機能を駆使することによって、対面実施に劣らない効果が得られることがわかった。

一方では、通訳の正確性と迅速性に対する評価記録からは、下記の課題を見えてきた：

- ・専門用語への理解が不十分、それゆえ適確に通訳できない
- ・長文となると、メモ取りできず、訳し漏れにつながる
- ・ニュアンスは適確に訳せない
- ・聞き取れないなど、外国語能力の向上が必要
- ・短期記憶力の向上が必要

- ・わからないところを確認する習慣が必要
- ・覚えきれない時は、短く切って話すよう求める
スマートな言い方の習得

以上の課題はいずれも通訳基礎トレーニング法の持続的な取り組み、定期的にロールプレイ演習に参加、医療通訳の知識の蓄積が効果的な解決方法と言える。

3. リモート研修の長所と短所

リモートによる演習参加のメリットは何よりも移動する必要がなく、自宅からでも参加できること、リラックスして集中できること、地域を跨いで遠く離れた他県の通訳者との交流ができて、新鮮な刺激を受けられることである。これらの点においては、ここ数年連続で高い評価を得た。また、感染のリスクがないことも高く評価された。

デメリットは、例年通り通信環境の問題があることが挙げられたが、実際研修に差し支えるほどのトラブルがなかったことから、通信環境は徐々に改善されていると考える。最も多く指摘されたのは、医療者、患者とのアイコンタクトつまりお互いに表情の確認しづらい点、参加者同士の交流は対面のように自由できない点である。また、通訳者のメモの良し悪しを指導者が確認できない点も挙げられる。

上記のことを総じて考えると、リモートによるロールプレイ演習は通常に通訳力、現場力の向上に一定の効果がある。また、遠隔通訳の実践の場としても有効であると考えられる。ただし、リモートの機能面のメリットを活かせるようになったが、通信環境の問題の他、参加者間の交流はデメリットとして存在し、改善が必要であることも示された。引き続き IT リテラシーの向上と通訳基礎能力の強化を目的とする研修を定期的に継続して実施することが通訳者養成に必要不可欠だと考える。

4. シナリオの充実と通訳指導

本研究班は首都圏の他、宮城県、沖縄県でも外国人を対象とする HIV 検査会を実施している。検査会での通訳者派遣は MIC かながわと

CHARM に依頼し、当研修を受けた方を派遣することになっている。そこで今年度は HIV 検査時に必要な医療者と患者のやり取りのシナリオを新規に作成した。HIV 検査に関する知識のみならず、リスクの高い性行為や在留資格に関するやりとりも盛り込まれ、充実したシナリオとなったものとする。

また、検査方法や結果説明の通訳は何より正確性が重要で、ロールプレイ演習前の沢田医師の解説、さらに演習後個々に対する講師の丁寧な指導が効果的であった。性行為のリスクについての説明は声に出して訳しづらいところがあるが、参加者の前で通訳演習ができたことは自信につながるものと見受けられる。

E. 結論

Zoom によるリモート通訳研修は研修のひな型ができ、運営する側と参加側もリモートによる講義や演習に慣れ、よりスムーズな実施となった。ハードの操作面においては、回を重ねるごとに研修の運営側と参加側共に向上していると実感している。また、IT ツールの使い慣れは、遠隔通訳のスキルアップにも直結すると思われる。とりわけ参加者の最多数が 50 代以上の熟年層であることを考慮に入れると、リモートによる通訳研修自体が有効であると考えられる。

研修内容については、座学では、例年通りの HIV・結核の基礎知識、感染症に関わる社会保障制度、セクシュアリティの他、今年度は通訳者のための PrEP 入門も取り入れた。取り上げる基礎知識のカバーする範囲がさらに広がり、研修内容はより充実したものとなったと考える。

ロールプレイ演習のシナリオは、HIV 検査会で実施された HIV 検査の流れ及び陽性告知の場面を切り取り、新規シナリオにした。これで研修用シナリオは HIV に関するシナリオ 4 本となり、結核 3 本加えて、計 7 本と充実した。

通訳基礎技術の講義はスマホやパソコンでできるトレーニング法の紹介と演習に特化した。さらに言語別グループワークも行い、練習することの効果と持続することの大切さを体感してもらうことを目標とした。効果はあったものの、今後各自どこまで持続していけるかは依然として課題だと考える。

研修参加者は今年度医療現場で働いている看護師の参加が少し増えていて、今後更なる参加に期待したい。また、医療通訳に興味を持つ若者も一定数いて、今後能力の進展が期待される。一方では、これまで自己流で通訳をやっていて通訳トレーニング法を今回の研修で初めて知ったという声もあり、通訳育成はまだ長い道のりがあると実感した。とりわけ外国人労働者の増えているネパール語、ベトナム語などの少数言語は、通訳者の担い手が少なく、ネイティブに期待したいところだが、研修になかなか参加できないという難しい状況にある。少数言語の医療通訳者養成は引き

続き課題である。

総じていえば、通訳者養成は継続が大切で、定期的に研修を実施することは医療通訳の底上げに重要であると改めて感じている。次年度も感染症に特化した通訳研修を定期的に行うことにより、参加者の通訳スキルアップと医療知識の蓄積に寄与したいと考える。

参考文献

- 1) 日本政府観光局(2024)「報道発表資料(2024年1月17日)」
https://www.jnto.go.jp/statistics/data/20240117_monthly.pdf
- 2) 国土交通省観光庁(2020)「訪日外国人旅行者の医療に関する実態調査を行いました(2020年3月27日)」
https://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000329.html
- 3) 一般財団法人 日本医療教育財団(2018)『医療通訳』
<https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000385181.pdf>
- 4) 北島勉、他(2022)『外国人に対する HIV 検査と医療サービスへのアクセス向上に関する研究』令和3年度総括・分担研究報告書(厚生労働省・科学研究費補助金エイズ対策研究事業)

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

d. どちらかといえばそう思わない e. まったく思わない

19. 今までに、「リプロダクション」の通訳技法は知っていましたか？

- a. 知らない b. 聞いたことがある c. 多少練習したことある
d. よく練習している e. その他

20. 「リプロダクション」の訓練は通訳のスキルアップに有効だと感じましたか？

- a. 強くそう思う b. そう思う c. どちらかといえばそう思う
d. どちらかといえばそう思わない e. まったく思わない

21. 今までに、「ノート・テイキング」の通訳技法は知っていましたか？

- a. 知らない b. 聞いたことがある c. 多少練習したことある
d. よく練習している e. その他

22. 「ノート・テイキング」の訓練は通訳のスキルアップに有効だと感じましたか？

- a. 強くそう思う b. そう思う c. どちらかといえばそう思う
d. どちらかといえばそう思わない e. まったく思わない

23. 今回のリモートによる研修は、通常の対面による研修に比べて効果的でしょうか。

- a. とても効果的 b. 効果的 c. 変わらない
d. 困難 e. とても困難

24. 今回のリモートによる研修は、通常の対面による研修に比べてどのようなメリットがあるでしょうか。(複数選択可)

- a. 移動等時間ロスがない b. リラックスして集中しやすい
c. 遠隔でも参加可能 d. 感染リスクない
e. グループ分けが容易 f. チャット機能は便利
g. その他 ()

25. 今回のリモートによる研修は、通常の対面による研修に比べてどのようなデメリットがあるでしょうか。(複数選択可)

- a. 通信環境不安定 b. 通信機器使い慣れない
c. 意見交換困難 d. 参加者間の交流困難
e. 集中力持続困難 f. 質問困難
g. その他 ()

26. 今後の研修で取り上げてほしいテーマがありましたら、教えてください。

コメント ()

ご協力有難うございました。

27. このアンケートから判ったことを学会などで発表する場合があります。

発表にご自分の回答が含まれることに同意されない場合は以下の「同意しない」の欄にチェックをして下さい。チェックがない場合は同意したものとみなさせていただきます。

- a. 同意する。 b. 同意しない。

